



長谷寺かわら版

百日紅

100号

2019 (平成 31) 年
1月1日

古文書展

明けましておめでとうござ
います。旧年中は大変お世
話になりました。今年もよ
ろしくお願ひします。

さて、昨年の夏から秋にか
けて、徳島市八万町の県立
文書館で「長谷寺の古文書」
展が開催されました。

文書館の逸品展

駅路寺

長谷寺の古文書

平成 30 年
8月7日(火) ▶ 10月28日(日)

徳島県立文書館 2階 展示室

入場無料

【開館時間】午前9時30分～午後5時
【休館日】毎週月曜日・毎月第3水曜日
【白濁予防】毎日9時～15時(休館日を除く)
【展示解説】8月24日(金)・9月24日(月・振替休日)
10月13日(土) 午後1時30分～

文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島市八万町向神山
Tel.088-668-3700 FAX.088-668-7199
http://www.archiv.tokushima-ec.jp

たみたいです。

ただ展示された史料を眺め、解説を読んだだけでは、小難しくよく分からないし、あまり興味もわかなかつたかもしれません。

行ってみたけどよく分からなかった方、残念ながら行けなかつた方、もちろん見に行つてとてもためになったという方たちの復習のためにも、今回はこの古文書展の話をしみましょう。

☆前史

ところで、今回の展覧会が開催されるまでには、いささかの経緯がありました。

私が鳴門に来て間もない頃のこと。先代住職が寺史をまとめたときに使った史料だけでなく、下張りに文字の書かれた和紙が多く使われた古い大量の襖も、蔵の奥に放置されたままでした。

曲がりなりにも大学で歴史を学び、恩師について村や町

の古文書の整理を手伝った身ですから、今のうちに何とかしておかなければと考えました。

幸い徳島には、県立の文書館がありました。さっそく文書館のスタッフに相談を持ち掛け、館のスペースを借りて、寺の経費でアルバイトも雇つて、膨大な文書群を整理することにになりました。まだ先代住職夫妻も元気で、時間にもゆとりがあり、幾度も館に足を運んだものです。

当時文書館は、開館して間のない頃で、ようやく県内にある史料の調査に着手しはじめたばかりでした。

ちなみに八万町に、21世紀館、図書館、美術館、博物館、そしてこの文書館を含む総合施設「文化の森」がオープンしたのが1990年11月。ぼくが鳴門に来たのが翌'91年の4月。いま思えば、

絶好のタイミングだったのか

も知れませんが。いまはこういう文化財に携わる公立の施設の保管庫は、どこも満杯で、受け入れる余地はないと聞きます。

この整理作業には、県が特別に予算を付けてくれて、撮影に要する少なくとも経費を負担してくれました。

文書の整理は、まず襖の下張りを剥す作業から始まりました。次にそれらを全部撮影し、一点一点、手に取つて読みながら、タイトルを付けます。これは、内容を理解できないと到底できない作業ですから、いわゆる「くずし字」を読む能力が求められます。

また、ある程度長谷寺のことも知っておかないと理解できない文書もあるだろうと、幾度か勉強会もしました。

文書のリストができれば、整理は一段落します。このときに整理した文書群

は、あまたの段ボール箱に納められ、館の保管庫に積み上げられました。全体で700点近くありました。

☆舞台裏

あれから四半世紀が経ちました。その間、ただ預けたままの文書たちのことが気になってはいたものの、日々の忙しさにかまけて、ずっと放ったままでした。

昨春、長谷寺文書の整理がようやく完了したので、正式に寄託の手続きをとり

たいと、文書館の館長とスタッフが訪ねてみました。

「こういう施設は、どんな人が責任あるポストに就くかで、運営のベクトルが変わります。いまの館長は近世史（江戸時代）の専門家で、ようやく館が長谷寺文書に注目したということもあったのでしよう。」

その際、興味深い史料が多かったので、ぜひ「古文書展」を



開催したいという申し入れがあり、今回のような運びになったわけです。

展覧会が始まったのは、盆経の真只中まんなかのことでした。多忙な夏のスケジュールを終えてひと息ついた9月半ば。いつも寺に出入りして下さっている常連の仲間たちから希望者を募り、小さなバスをチャーターして、見学に出かけました。

ありがたいことに、館長さんが直々に、展示の解説をして下さいました。

ところで、徳島には寺院関係の史料はほとんど残っていない

ませぬ。なにしろ、江戸時代の過去帳さえ残っていない寺がほとんどです。

その意味では、長谷寺に残る史料群は、江戸時代から明治・大正期の徳島の歴史を知る一級史料といえます。

文書館の建物は、旧県庁の一部を移築したもので、展示室はかつての知事室だった

そうです。だから多くの史料を展示するにはあまりに狭い。涙をのんで数を絞り、思い切って厳選した史料のみを展示したのだそうです。

ここでは、展示されたすべての史料を紹介するわけにはいきませぬから、館長が解説して下さいましたものの中から、いくつかを取り上げて、長谷寺史の一端を紹介します。

☆駅路寺

まず取り上げるべきは、なんといつても「駅路寺」の史

料です。 1頁に掲載したチラシにある2点が、鳴門市の文化財に指定されており、これを含めた数点の関係文書だけは寺で保管しています。市の指定文化財は、原則として

市域から出さないといいきまりです。ただ、四国遍路などの展覧会などがあると、

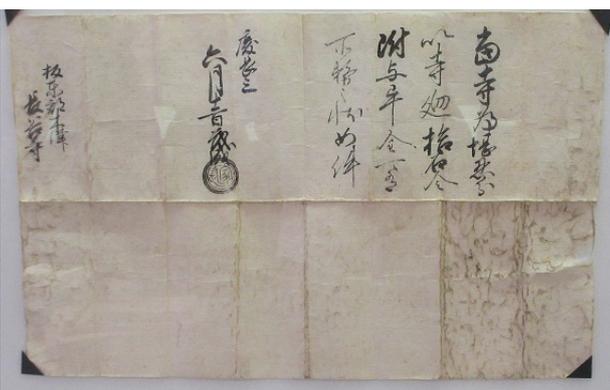
いままも駆り出される、結構人気の史料です。 土佐の戦国大名・長曾我部氏との戦さが終わり、蜂須賀家政すかいえまさ（正勝しんしょう）小六の子あわのこです）が豊臣秀吉から阿波国あわのくにを与えられたのが天正13年てんしょう13（1585年）。

少し下つて慶長3年けいちょう3（1598年）のこと。家政は、藩内の街道沿いの八か寺に対し、領地を与え、遍路などの保護と、あわせて旅人たちの監視を命じました。これが駅路寺

で、家政の領国経営の一環として創設された、徳島藩

独特の制度です。 長谷寺には、駅路寺に指定する旨を記した文書そのものは残っていませんが、その運営のため、「寺廻拾石てらまわりじしつ」（寺の周辺の、10石の米を収穫できる広さの土地）を与える旨の文書があり、家政の判が押されています。

も珍しく、その意味でも極めて貴重なものといえます。 もう一通は、寛永18年かんえい18（1641年）に出された2代藩主



忠英の花押（サインのこと）のある「定書」。

これは幕府のキリシタン禁止令を受けて改めて出されたもので、時代の変化に対応したものです。

ところで、藩による駅路寺指定と領地の付与は、戦乱で灰燼に帰した長谷寺の復興の起点となりました。いわば、ここから長谷寺の新しい歩みが始まったわけです。

この家政の文書は、そういう意味でも、寺宝として扱われ、代々の住職に引き継がれていったものなのでしよう。

☆梵鐘の危機

「山のお寺の鐘が鳴る」と童謡でも歌われているのだから、寺に鐘はつきものと思われるかもしれませんが、市内でも、梵鐘のある寺はむしろ少なく、鳴門結衆でも、12か寺のうち、わずか3か寺に過ぎません。

第二次世界大戦の金属供出の際、長谷寺の鐘も出征して戻らなかつたという話

は、この紙面でも取り上げることがありますね。

あまり知られてはいませんが、幕末にも同じような命令が、幕府によって出されたことがありました。安政2年（1855年）年のことです。鑄潰して、攘夷（異国退治）のための大砲などを作るつもりだったのでしようか。

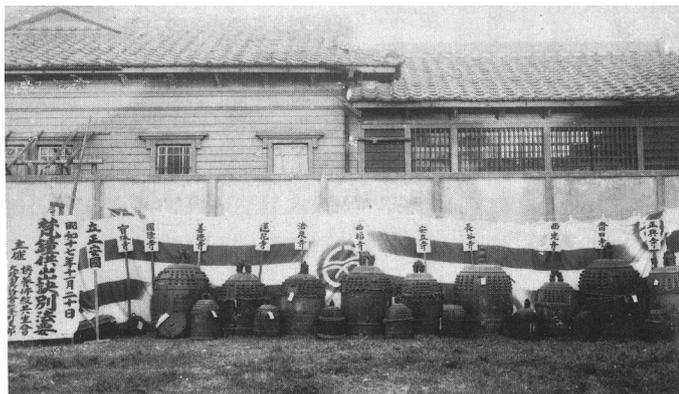
ちなみに、異国船に備えて大砲を据えるために作られたのが台場で、將軍の膝元の江戸では「御」を付けて呼ばれました。これが東京湾の「御台場」です。

ただし、宗派の本山のものや時を告げる鐘、あるいは由緒のある鐘は除外するとされました。

これはさきの大戦のときも同じですね。名のある鐘たちは出征を免れました。幕

末の先例を参考にしたのでしよう。まさに歴史は過去と繋がっています。

この幕末の鐘の供出令にさいて長谷寺は、岡崎城の城代の益田豊正殿から賜ったものであるという理由で供出を辞退しています。これが本当なら200年を超える由緒のある鐘ということになります。が、実際はその間に幾度か改鑄が行われています。うまく言い逃れをしようとし



第2次大戦中の「梵鐘供出訣別法要」

たわけです。

当時徳島藩が、幕府の鐘集めプロジェクトにあまり熱心でなかったこともあって、多くの寺でも供出を免れたようです。

むろん、大戦のときはそうはいきませんでした。市内に鐘のある寺が少ないのは、この金属供出のせいもあるのかも知れません。

☆改宗改名事件

これもやはり幕末の話ですが、長谷寺が天台宗に改宗させられ、名前も観海院に変えさせられるという事件がありました。

天台は、徳川家の菩提寺だった寛永寺の属する宗派で、蜂須賀家も、それに倣ってかはたまた迎合してなか、城下に天台の寺院を創り、徳川家の先祖を祀りました。いまもそうですが、当時の阿波にも天台宗の寺院はありませんでした。阿波は

やはり真言宗が多いです。

藩主の肝煎りで天台宗の寺院は創ったものの、僧侶の確保は容易ではなかつたのでしようか。大きな法要などでは、京都の比叡山延暦寺の僧侶を招いたようです。

しかし万延元年（1860年）、その延暦寺からの僧侶の派遣が途絶え、天台の法要が続けられなくなるという事態が起ります。そこで藩は、

藩内の有力な真言寺院を天台に改宗させ、法要に参加させることでこれを取り切ろうとしました。対象は、四国一番札所の霊山寺や小松島の地藏寺など、けっこう名のある寺院たちです。

わが長谷寺もこれに巻き込まれてしまいました。いまでもとても考えられませんが、当時はそこそこの有力な寺院だったらしいです。

このときは、なにしろ宗派が変わったわけですから、地

域の真言宗の結衆からも離れ、大法会などの行事は、独自で行いました。

それにしても、別の宗派の法要のために、寺院に改宗を強い、寺名まで変えさせるといのは、あまりに強引な話です

しかも、いくら同じ仏教、どちらも密教だからといって、宗派と寺の名前を変えられるだけで、天台の法要ができるというわけでもないでしょ

う。

このときの藩主13代斉裕なりひろの実父は、徳川11代將軍家斉いえなりです。自身の実家の先祖供養のための政策だとしたら、藩の首脳たちも困惑したかもしれません。

もしいまこんなことをされても、戸惑うだけです。うまくいくはずがありません。藩から呼び出されて法要に集まった僧侶たちの、困惑と苦笑いの顔が目に見えよります。

ただ、この改宗命令を拒否した寺もあつたらしく、唯々諾々と藩命に従った先輩の姿勢が、へそ曲がりの生臭坊主としてにはちよつと悔しい。

むろん檀家さんたちもさぞ戸惑ったことでしょうね。檀家まで天台に改宗させることなど、できるはずもありません。藩に対しては天台の顔、檀家に対しては真言と、使い分けたのでしよう。

しかしこの強引すぎる政策

も、時代の奔流に押し流されてしまったようです。観海院と記された史料は、明治元年あたりまでは見られるものの、以降は姿を消します。むろんこの年、徳川幕府は瓦解してしまいます。

明治維新、そして神仏分離の嵐が吹き荒れる前夜の、徳島で起きたちよつと風変わりな事件です。

この他にも、隣の金毘羅神社との関りを示す史料、寺

の土地に住み寺に奉仕した寺中百姓関係の史料、三重塔（現・毘沙門堂）再建の見積書や近隣の絵図など、興味深い史料も展示されました。これらについても、機会があれば何らかの形でお話ができればと思います。ところで、先にも書いたように、県内では、まとまった史料が残るケースはそんなに

はありません。むしろ稀といえます。

「百日紅」は、私が鳴門に住職たちがしつかりと記録や文書を残しました。今回の文書館への寄託は、さらに後世まで伝えるための処置です。加えて、地域の史料は地域の財産でもあります。寄託した史料は、誰でも申請すれば閲覧可能です。今後、近世阿波の寺院史・地域史研究に資することを期待したいと思います。

「百日紅」は、100号になりました。定期刊物としての「百日紅」は、ここでひとまず筆を擱きます。100号だからというわけではなく、書きたいことがなくなってきたからで、それがたまたま100という数字と重なっただけのことです。まさに名前の通り、百度咲いたということに



◆休筆します

「百日紅」はとうとう100号になりました。定期刊物としての「百日紅」は、ここでひとまず筆を擱きます。100号だからというわけではなく、書きたいことがなくなってきたからで、それがたまたま100という数字と重なっただけのことです。まさに名前の通り、百度咲いたということに

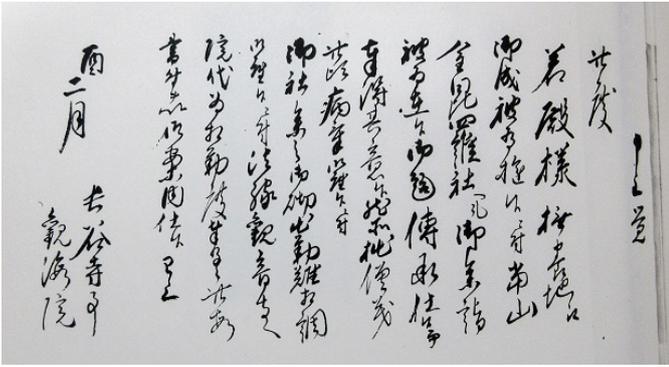
ございました。

書きたいこともないのに無理して発行するのは、本意ではありません。だからといって、寺としての発信をやめてしまおうわけにもいきません。

これからは、必要に応じて、あるいは書きたいことができたら発信するというスタンスをとりたいと思います。どうぞご了承ください。

◆カンパと切手

この他にも、隣の金毘羅神社との関りを示す史料、寺の土地に住み寺に奉仕した寺中百姓関係の史料、三重塔（現・毘沙門堂）再建の見積書や近隣の絵図など、興味深い史料も展示されました。これらについても、機会があれば何らかの形でお話ができればと思います。ところで、先にも書いたように、県内では、まとまった史料が残るケースはそんなに



これは展示されたものではありませんが、「長谷寺事観海院」から藩に宛てた便り。どうやら住職は、ご病気のようです。